WASON
Feb. 1894
no. 365

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百六十五號

要目

病める母と二歳の小悴　若松しづ子

吁、かの瘋癲者
チックス女史言行錄を讀む
一　水師提督ペルリの妹
二　日本瘋癲病院の創立者
三　清濁二様の氣稟

友なし猿　みむろのや

明治二十七年二月三日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百六十五號目録

社説

吁、かの瘋癲者（上）

ドロセア、ヂックス女史言行録を讀む

一 水師提督ペルリの妹

二 日本瘋癲病院の創立者

三 清濁二様の氣稟

兒籃

病める母と二歳の小悴（若松しづ子）

家政

衣服の嗜好に就ての雜感（ふみ子）

小兒の寒冒を防ぐ法（けい子）

初生兒の産毛

廉にして上等の歯磨粉

文藝

同訓異義

徒然草

友なし猿（みむろのや）

米文郷近詩二首

雜録

去一年間万國婦人の進歩

桂の東（東京柴山子の舍月並會）

福井新聞女學雜誌を評す

交詢

商界にて學問したき人の問

同じく答

書架

象山先生女訓

片々

成瀬仁藏氏○園照子○田邊花圃女史

時報

小學教育費國庫補助○群馬縣の子守教育と夜學○生徒父兄への通知書○美談○婦人の集會多し○京都婦人慈善會○土佐婦人愛友會○風紀○女監取締○英國婦人勞働賃銀

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百六十五號

明治二十七年二月三日發兌

社説

吁、かの瘋癩者（上）

ドロセア、ヂックス女史言行録を讀む

（一）水師提督ペルリの妹

嘉永のむかし、福音をもたらして開港を促がし、大祈禱會を開きて而してのち通商の談判に迫まりたる、水師提督ペルリの令妹某氏は、今や亦た日本に於ける瘋癩者愛遇の途の大ひに開けんことを望みとし、此國に於ける此事業の同志者が熱友ならんことを期して、玆に、ドロセア、リンデ、ヂックス孃が言行錄一卷を寄贈せられたり。

ヂックス女史が名は、尤とも深く少數者の心の中に印刻せられたれど、廣く世上に聞ゆるに至りたるは、近年長逝して其多年踏晦の幕開けたるの后にてあるなり、一生八十六年のいのちは、斷じて夢の如く、霧の如き敢果なきものにてはあらざりき。米國、歐洲、及び日東の我國を通じて、自から起したるか又は激勵せしかの相違こそあれ、必竟その主動精神となりて悲慘なる瘋癩者を愛護する病院を設立せしめたると、前后通計、三十四。此外、各州、各國の政府に建議し、又は瘋癩者の實狀と其被遇の慘况とを書記して一般公衆の良心を驚ろかし、天下の輿論を西より東に轉ぜしめたるの勳、輕々しく俄かに述べ盡すべからず。スペインのセント、セレサ。アッシシのサンタ、チアラは、古代の舊敎婦人にのみ限らず。ヒリツピ、ピチル。ウイリアム、チウークは、近代の男子の間のみに存せず。歐洲各國の帝王に巡遊して、到る處ろ其の監獄を改良せしめたる博愛美談の聖人は、今や、瘋癩院改良の事業に於て女性として再現したり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

此の崇敬すべき女傑は、八年前、八十六歳の一生を美くしく完結せしめて、最と平安に長眠したり。而して、其の懿ろくべき言行が筆記せられ初めて世の公衆に知られたる事の極めて近日なるは、何ゆゑぞ。

（二）日本瘋癲病院の創立者

日本に於ける西京東京の瘋癲院すら、最初は、此女傑の激勵によりて種子をはらみしと知らば、其感化力の流るゝは深き地底にして、常に少數有力の人の靈魂の奥より奥に傳わり、發して源泉となり、開けて万朶の櫻となりつる此ほいは、万衆皆な、其の最下底、最深宮に、一個の未婚嬢が温乎として靜かに座するとを覺らざるの所以を知らんか。

試みに左の一書を讀め、

余が親愛なるヂックス嬢、久しく通信不申上、御身が深き熱心に居ます事業に關してなほざりにせしと思召すとなかれ、私事○○、其后、多くの時日と注意とを此の問題に注ぎ、終に京都にて一の瘋癲病院を首尾よく設立いたし今また東京にて更に一ツ設立中に有之、遠からず此の善事の爲めに開かるべしと存じ候、此外尚追々設立可致、願はくは、多くの不幸者を切めては少しにても減ずるの便りとならんとをと、熱望いたし居候

千八百七十五年明治八年十一月廿三日

日本東京にて　森　有禮

我國に於ける彼女の縁故すでに如此く碑し。而して、彼女が名の公衆一般に普ねく知らるゝは、即はち今日を以て初となすなり。嗚呼、此人、何をもつて斯く久しく世に聞えざりしか。

“Not unto me, not unto me, but unto Thy Name be the praise !”。夫れ、善事を成して譽れを求むるは、一種の貿易なり、商賣なり、稅吏も之を能くすべし、何の美くしきとかあらん。榮を主に歸し、自から奴婢となりて塵芥に沒す。これ、俗界凡士の容易すく認識すると能わざる所以なりとす。彼女傑を崇敬せし少數の知己は、絶世の言行の世に知られで其の教への公衆を益せざるとを惜しみ、幾多の文士は、屢々懇願して、其の傳紀を世に出さんとの許しを要めたり。左れど、彼女が答へは、下の如くなりき、

妾が言行を世に公けにし玉わんとか。妾が一身の權理を侵し、かゝる苦痛と重大なる妨害とを與玉はんずる御處置は、決して御計畫なし下されまじくと直言いたすとは、不正にあらじと信じ候。こは實に妾が天職の實德をも害なひ玉はんとするとに候。妾は、名稱の著はるるを誇るものに無之、高名は殊に嫌惡する所に候。妾に與れあり、妾が任務せし所ありとせば、そは皆な我國の所有となるべきものに候。妾が歷史と妾が信情とは、妾が友人等に献げたるものに候。臨終の天使來り、妾が勤勞を束縛して、其經歷と結果とを勘定せよと申さんとき、告白いたし候て然るべしと存じ候。此期の來るも最早や遠かるまじ。そも〳〵、現存する婦女子の爲めに、又其事業の爲めに、必要にもあらぬ公告をいたし候ことは、女性の爲めの最上の裝ほひたる愼しみと遜節とに矛盾するものならんと、いと〳〵不審かしく存ぜられ候。

これ、彼女が久しく公衆に知られざりし所以なり。

況んや、彼女は、末期の近づくを知りて、諸友に、命令に均しきほどの一書を致し、すべて從來のわが書文を悉とく破りすてよと申し遣り、諸友多くは、其の命令の如き委賴に從がひしかば、左なきだに隱れたる彼女が一生の言行は、一としほ、錦繡を織り出すべき糸すじをなくしたり。

（三）　清濁二樣の氣禀

散れる金砂をひろひ、落ちし玉をつかねて、茲に四百頁の言行錄となりたる彼女が傳記をよめば、彼女は、一千八百〇二年（享和元年）四月四日、亞米利加合衆國メイン州に生る。氣丈にして熱烈なる祖父母の品性を遺傳し、感情切に、意思强剛にして、烈火つねに心中に燃ゆ。夜半かつて親友ヘッス孃に書を認ためて云ふ、（二十二歳の時）御身、妾は容易すく泣くと言ひ玉ふ。實に妾は幼き時より泣くと涙を灑ぐとの習はせとなり、思はざる喜悅、望外の悲しみなど突如として心を打つときに於ては、滿潮の如く漲ぎりせまる情感を制止せんとなか〳〵の至難事に候。今は孤獨にくらし、何んの喜憂の刺激なきにはエル、イー、エル（Letitia Elithabeth Landonと云ふ英國少女の詩人のかくし名にて沈鬱奇變の想思にとみ、もし長生したらんには名たゝる女詩仙となりけん天才なり）の天才に對して、洪

水のさゝげを呈しつゝ侍る、…………妾は、更に善く感じ更に善く實行することを勉め申さん、されど哀泣することは到底止むることあたわじと存じ候。

かゝる女傑のつねとして、初めは未だ純ならざる氣概を存し、之によりて活動し而も自から賴みつらんか。慨然として義に勇さみ、熱感して危うきに進み、好く弱を助け貧をあわれむの情けはありしが、未だ謙遜の聖味を覺らず、中心驕然として、他を睥睨するの慨あり、一種の利己心未だ去らず、ただ、知己と親戚と自己に賴むものとにのみ、身を獻ぐるの誠はありき。左れば、此頃ほひは、隨分我儘にして、純乎たる神仙的の至誠正意は未だ發揮せざりけんに、彼のウイリアム、チヤンニングは、明らかに彼女が淸濁二様の氣禀を觀識し、尤とも、眞率に之に忠告して曰く、

御身が前途を觀望して、余は、多くの掛念を抱けども、遂に亦た好望を存するぞや、多病がちの御身が健康は、前途の事業を暗くするが如く見ゆれど、余は信ず、此の身躰の病は手當て次第快復すべしと。之よりも大切なる一事と云ふは、其の世に益を爲さんとする計畫を、彼の遊戲滿足の計畫とひとしく、只管ら神の御心に任せ奉ることを修練するにある也。吾等は、世に益を成すてふ計畫をもつて、反つて、我意、虛榮、高慢の機會となすこと、他の宜しからぬ事を案ずる時と同じ。御身が重大なる危險の一つは、即はち此所ろに存せずや。こゝに余が注意し參らする弱點は、もとより善き心の中に存するものにてはあれど、均しく亦た弱點なり。…………左れど、吾等が短所と長所とは、相ひ結び相識りて一つとなり、其一つを伸さんが爲めに他を亡ぼさざる可らざる如きことのあるもの也。されば、玆に御身が短所を防止せんとするに當りても、もし之が爲めに其美なる長所をも害わざる可らずとせば、余は恐懼して此の忠告を取消さゝる可らず。御身が尊重すべき長所、此の爲めに亡びんとは、堪ゆべき所にあらず。

嗚呼、チヤンニング、よく女傑の心相を知れり。英雄、頭を反へせば神仙たり。かの熱情にして我儘なるものを變へて、之に洗禮を授くる人は誰れぞ。

チヤンニングは、彼女に於ける一生の知己、亦た先達なりき。之に感化せられて、熱情を慈善事業に傾注し、彼のエリサベ

ス、フライ女史と同に、「妾が如き一生は尋常の乙女の倣ふべきものにあらず、寧ろ、戀ひし、愛し、樂しきホームを造らんこそ其の使命なれ」と告白すべき情け切なる一身を擧げて、極めて慘澹たる瘋癲者に許したり。チヤンニングは、蓋し彼女が師父なり。

左れど、此外に、彼女をして純成せしめ、聖化せしめ、遂に一身これ信仰、一生これ主の忠實なる下婢とならしめたる大動機ありとせば、恐らくは、其多病なるとにてありつらん。屢ば血を吐きて、半ば死し、たゞ氣を以て生きたり。寸前に死あり、周圍に苦痛あり、榮華の花のいのち暫しと知られ、露の玉のつなぎ前途にかけし、屢ば地を轉じて屢ば咯血し、身躰衰弱して、靈機いよ〳〵きらめきたり。

親愛なるアチー（彼のヘッス孃の事）昨夜ねむりがたく、轉輾時刻をすごしてのち、一時頃起き上り、フランチルの上衣にて温たかに包み、藥をさがさんとて床を出でしとき、ふと窻外に天色の驚ろくべく鮮やかなるを認め候ひき。燦めく刀と寶玉を織り込みたる帶とをはきたるヲリヲン星。金牛宮星の燃ゆる眼となりたるアルデバラン。燦爛たる幾多の從者を引連れたる土星。愛すべき七曜星。炎の如き狠星及びプロサイヲン。その光を競ふ下には、美くしき宵の明星すでに姿をかくし。獅子宮は、層列せる華麗の鎌をひつさげ、其他、幾數千、幾數万の星宿、その〳〵燈しを照らして、蒼穹を明るくし、靜かに眠れる地球の天蓋を張り居たり。實に靜かなる有さまにて、病める人と、痛める人との外は、皆な睡眠の支配を蒙むり居たり。妾は好まぬ乍ら身を反し床にもどりて、再たび疲れたる咳をいたし候ひしが、此時、過去に於ける神の御恵を感謝するの情漲ぎり起り、又、ゆく末に於ける謙遜なる信任をもて、枕の上に首べは置き乍ら、一と夜、ついに眠らず、たゞ沈思して過し侍りしなり。

嗚呼多感、憂鬱の人、一靈變の經驗を經たるものは、即はち能く此邊の消息を味はひ知らん。

兒藍

病める母と二才の小悴

若松しづ子

ムーッ、かあちやま見るんだい、かあちやま見るんだァい。ばあやの引止むる手を拂つて、及腰に襖を推開け、病室に入來る者は、病める母の小悴、即ち今年とつて、四才、二才に滿ちて、漸く一ヶ月計り過ごした太郎です。手織縞の綿入に袂盡しを白飛つゝ紺の羽織、何れも筒袖のものを着なし。裾は高く膝の下へ僅に二寸計り垂れる已ですから、赤格子の股引はいた脛と、五文の紺足袋が包んだ小さな足のまめ〳〵敷働を聊かも妨げません。其他の裝束は白綿フラチルのおぶらやさんを胸から前へタップリと後ろへ廻るほどに掛け升て、其下紐には洗ひさらしの絹ハンケチを結び下げ升た。

さて太郎は己が二尺の丈を天地に恥ずる氣色とては更になく得々と濶歩して、母の枕元へ來り、小さな膝頭を揃へて、チヨコンと坐り、林檎の樣な顔を傾むけ、細くした眼まで笑わして、豫て敎へられた通りに、

かあちやま、おはよ、キイキいかゝ?、

と申升。母は病苦に窶め勝な顔を我知らず弛べ升、さうして

坊ちやん、ありがたう、かあちやま、ハッグして、キスして頂戴な。

母の要求を聞いて太郎は直ぐには近づきません、先づ脇に下つたハンケチを探つて、覺束ぬながら鼻の下の掃除にかゝり升。これは太郎が人をキスする前にいつも欠かさぬ慇懃な注意です。母はよく知つて居るとなのに、またしても、ウッカり忘れて、何故の躊躇といふ面もちで、頭を擧げ升。併し直ぐに思ひ出して、ニッコリ笑ひ升。

太郎は間もなく立あがり、イザといはぬ計りに、悠々に母の頭の上へ伸しかゝり、頸に抱きついて——處もあらふに—冷度なつた母の鼻の上を——二ッ、三ッ、四ッ、五ッとキスし、あとは、おしやぶりを思ひ出してか、その先をペロりと舐め「ヤッハッハ」と笑らひ升。母はさのみ迷惑さうでもなく、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

オヤ〳〵、坊ちやん、舐め升たネ、

といひながら、唾のあとを拭ひ升が、心の中に、此小息子が軈て八字髯を貯へ、母の前に小理屈を弁らべる大倅になるとか、いつそ、いつまでも、今のまゝであれかしと譯もなき希望を心に浮べ升。

太郎は母の乳房を全く離れて二ケ月余になり升。廿ケ月間よく太郎を養なひ、よく彼を眠につけ、よく其痛處を癒し、よく其涙を乾かして、千万の苦惱を忘れしめた其乳房は、疾に皺び升たが、牛乳、刺身などが今は太郎の第二の乳房となつて、其手足をポチヤ〳〵と、其顔を望月の樣に肥へさせ升た。太郎は乳ばなれといふ、世間の子供が十に七八經過する衰退の時期を知らず、僅か三晩ほどのむづかりに、一切思切をつけ升た。然るに母の懐を探る中には、食慾の外なる趣味のあるものと見へて、太郎は夕ぐれ遊戯に倦んで眠氣を訴ふる時、母の添寐して、ねんねこ謠ふ時、夜中物をびえして、眼を覺したる時、いつも乳房を握つて、始めて安堵の嘆息を漏らし升。

又の日、太郎は母の病褥に暫らく添寐がし度とて頻りに哀願致し升た。許しを得て、エヘ〳〵と例の布袋顔になつて、大悦をし、さて床にはいつて、「かあちやま、好兒〳〵」とて、頬を撫で、眼を撫で、額を撫でして、軈て少しく遠慮氣味に、首をまげ、

かあちやま、乳見せてとうだい！

と頼み升。母は早速一方の乳房を出して、見せ升と、太郎はいよ〳〵眼を細くして、無闇に嬉しがり、「乳にお辭儀するんだとて、我額を乳房に磨りつけ、次に「キスするんだ」とて我唇に推あてゝして、余念なく樂しみ升。母は思はずポロリと一滴落し升。さうして、「此いぢらしさ、自由になるならば、いつまでも此兒を滿足させ度」と、母心に普通の未練を浮べ升。太郎は此時抱〆られ、其頭は上に、母は此兒の永遠の幸福を繰り返して祈願し、多病なる我身を忘れて、太郎に伴ふたる遙かの行末を思計り升。

母はある時、肩を凝らし、太郎を世話する人に頼んで按摩させて居り升た。太郎は始めてこれを見、母は正しく打擲されると思ひ、眼を丸くして、

かあちやま、いたいよ！かあちやま、いたいよ！。

といつて泣出し升た。いかほど說くも、諭すも無益で、果は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

彼人に打かゝり升故、據なく賺して室を出したとが有升た。

或夜庭の小松に木枯らしの音たてるに耳をたて、太郎は眼をパッチリ開いて、

雨こんこ?、雨こんこ降つて、とうちやま、ちめ度よ、雨こんこ降つて、とうちやま、ちめ度よ——

と少し泣聲になり升た。これは或夜父が自轉車上、大雨に逢つて、濡そぼくれて戻つた時を思ひ出し、幼な心に父の難儀を思ふ同情でしたから、母は太郎を賺して寐かしつけながら、心の中に、勞苦多き良人に告げて、眉を開らかせる代にしよふと、あどけなき言葉を其まゝ大切に秘置き升。

母は舊臘からの病に、四五日前まで病床にもだへ升たが、此頃の朝、太郎は起出で、着物を着かへさせられ、さて母の室よりあちらに誘なわれよふとする時、今朝計りは何故か獨りで行かず、

かあちやまも、起つきなちやいまし、かあちやまも、よ——、よ——

とて一向に聞分ず、いよ〳〵泣出す氣色に、母も始末に困じて、日和つゞきなり、引立ぬながら、其意に任せよふかと、半分は迷惑し、半分は興に入つて、とふ〳〵太郎の牛に引かれてソロ〳〵と床を離れ升た。

此日の終日、日あたり好き座敷に、太郎と母と靜かに遊び升た。太郎が得意顏に母の廻りを跳ねまわる處、折々布袋顏の眼を亡くなし、口計りにして、母の顏を覗きに來る處、小さな竹刀もつて、「イヨウ」の掛聲諸共、母に向つて來る處などはみなさんに一度お眼にかけ度樣です。

母は此日より起なれて、追々快方と申升が、なんと、太郎、は上手な醫者では有ませんか?。

家政

衣服の嗜好に就ての雜感

ふみ子

衣服の目的は冬暖に、夏涼しく、以て身躰を覆ふを得ば足れりといふものから、又人々の地位身分の如何に依りては、夫れ相應の服裝を調へ催ねばならぬともあるものなり。されば之が嗜好に就て一二言なすも、強に無益のわざには非ざるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さて衣服の色合摸樣などには、四季をり〳〵の流行はあるものから、偏に流行を追はむとて、年老ひたる人の、若く華麗なる色の衣着たる、姿容暴々しく鄙しげなる人の、如何にも優美なる服裝したるなんどは、却て夫が爲に其人柄一層悪しく見ゆるものなり。又流行の色なればとて、之れを上着にも羽織にも、亦帶〆下駄の緒に至るまでも採用ひて身躰の所々に、同じ類の色の散りたらむも見悪きものなり（故らに一樣の色になしたるは別問題として）夫れよりは主なる部分に好みの色を用ひ置き、他は之れに合して、うつり宜しき色を凡ての色の中より擇み取り、彼と是と程能く併せ用ひたらむ方宜し。

又實際よりも年齡を少なく見せむとて、故らに年よりも若き風姿をなしたるは意のほども見へ透たるやうにて甚見苦しきものなり。啻に見苦しきのみならず、却て夫が爲に實際の年齡よりもふけて見ゆるとあるものなり。故に若く見せむには却てじみなる色合縞柄等を用ひたる方宜しきやうなり。又之れと反對にて小娘の年增を眞似て、年齡よりもませて意氣なるつくりしたるも傍腹いたく笑止なるものなり。何れにも年格好に相應したるがよく、相應して眼に立たぬやうになせば、自ら上品に見ゆるものなり。

未亡人の華美やかなる裝ひしたるも見よからぬものなり。殊に良人身まかりて年月經ぬ人などは舊き着物着たる方は宜し新しく調へたりと見ゆるものを、綺羅びやかに着飾りたるは、何とやらむなさけなき心地するものなり。

婚禮の席に招かれて行く年若き婦人は、是も華美なる服裝は遠慮する方宜し。餘りにおづくりをなして、新婦と見紛はしくなりては禮に非ず。衣服色合其他にも注意して、成るべく眼に立たぬやうになし、新婦として獨り其席上の花と見へしむるやうの覺悟あるべき事なり。若き男子達も新夫に對して、かゝる心得あるべきにや、其は女學雜誌なれば言はず。

身の丈低く瘦せたる人の、幅廣き帶を大きく結びたるは見にくきものなり。帶の幅には一般の定まりありとも、身躰の格好によりて多少の增減はあるべき事なり。羽織の長さも亦是に同じ。丈高き人の短き羽織を着たるは、丈低き人の長羽織と同じほどに見悪し。

薄色の着物に手袋の色黒きは悪し、手袋の方着物よりも色淡

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

きがよきやうなり。

尚ほ此他にもいろ〳〵あらむなれど、玆には只近き頃一日他に出でゝ感じたる事のみを記せしなり。

小兒の寒冒を防ぐ法

けい子

外面にそよぐ寒風は、肌膚を劈くが如く、北向きの庭は、霜柱地の薄皮を支へて、立ち並び、南方の小路は、霜どけにて、泥田の如く、兎角外出に氣のむかぬ、今日此頃は、いづれの親々も、愛兒の外出を止め賜ふことなるべし、然るに今より二旬三旬と過ぎ行きて、やよひの空朧らかに、野邊には、鳥歌ひ花笑ふ、好時節來りなば、遽かに愛兒方を促して、外遊に誘ひ賜ふなるべし、これいと危險のことなり、此時必ず、風邪に冒かされ賜ふに至らむ、其故は軟弱なる小兒の皮膚、戶内の暖和なる温氣に慣れて、外寒に敵し難く、少しく冷氣に觸るゝも、忽ち寒冒に罹り、之より種々の恐るべき病氣を惹き起すに至る、いと恐ろしきことにこそ、さて之を防ぐには、如何にして可ならむ、そは決して難事にはあらず、假令寒中と雖も、天氣朗かなる日は、勉めて戶外出をなさしむるにあり、さすれば小兒の肌膚、次第に強壯に趣き、よく外寒に抗して、寒冒に罹る憂なし、

○初生兒の産毛

我住める草の屋の近邊に、去年の暮、産聲勇ましくあげて、出産たる嬰兒あり、其父母なる人いかなる心にをはすにや、此寒空外出には頭巾よ肩掛よと、誰れしも用意どり〳〵なる折からなるにも、關はらず、嬰兒の腦蓋に戴く大切なる、産毛を殘りなく剃りこぼち賜へり、其後何日も經ぬに、其兒邪氣に冒され、夜な〳〵むづかり賜ふこと、今も猶怠りなし、はしたなき下婢どもの談り合ふを聞けば、此頃は病勢次第に重りて、腦風とやらん云ふ、恐ろしき病に罹り、其父母も痛く心を、惱め賜ふとか、世の嬰兒を持ち賜ふ、父母に一言す、産毛は嬰兒の柔らかなる腦部を、護る唯一の金城なり、之を惜げなくも、剃りこぼちて、恐るべき病に陷らしめ賜ふごとき、たわけたる事ゆめなし賜ふこと勿れ、

○廉にして上等の歯みがき粉

歯牙は、消化器の一にして、固形食物を嚙こなして、他器の消化を扶助くることは、言ふまでもなし、其他音聲を調へ、顔面を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

正し、肝要器なることは人々の能く知り玉ふところなり、されば、幼少の時より能く、之を保護し、怠り賜ふべからず、さて齒牙を損傷するものは何んぞ、過熱過冷の飲食物なり、食物の殘滓より生ずる腐敗物なり、齒質の石灰を溶し去る酸液なり、齒面を磨り減らす齒磨粉なり、故に飲食品の冷煖を節し、齒牙を淸め、齒磨粉を擇めば、此害自ら去らむ、由て今齒牙を淸むるに、必用なるよき齒磨粉をつげ申さむ、木炭を粉にして毎朝よく、齒牙を磨がき賜へ、此齒磨き粉他品に優ること數等、且極て得易きものなり。

文藝

同訓異義（二）

五回に分載す

イ

イサギヨシ

清 濁の反にごりなくきよくすみてみゆる事

淨 穢の反さつぱりさして塵もつかぬ事煩惱なき意

潔 淸淨の二義を帶ていさぎよく潔白に見へる事

廉 分別ありて妄に人の物を受ぬ事德行ありて欲なき意

イル

入 出の反しきりの內へいる事、心で云へは心の居所にをる事わざで云はやどにをる事

容 受けいる事、つゝみてうちにする事、せまき所へいりこむ事

沒 水中に入たるものが見えぬやうになつてしまふた事

納 その物をいれてをさめをく事

イソカハシ

忙 閑の反事多くして心のせける事

閙 不レ靜貌市中群衆してもや〳〵さわぐ事

冗 役にも立ぬ事に取みだれて心いそがしき事

怱 匆同せはしくして心いそがしき事

遽 氣味せはしくさりこむ

イツハル

僞 誠の反つくりにせる氣味さうでもなき事をそれさ思はす事

詭 異形に目たちて見へる事、さし定たる事を外へはづしてするやうな氣味

謬 そのすぢをさりちがへさす事

贋 外の物をもてきて正物さ見せる事

佯 佯狂はにせきちがい、內證はさなくしてをもてむきをちがへてみせる事

譎 兵は詭道のるい、色々手をかへ目まぎろはしく見せる事

詳 陽佯同おもてむきのみせかけさ相違ある事

虚 實の反一向體もなき事

イタム

痛 いたみを身に覺ゆる事

慘 悲哀の切なるに用ゆ心の底につらく思ふ事いたく〳〵しき事

惻 心にそれをいたく〳〵しく思

傷 心にその事を思ひわづらふ事身にいたみあるが如し

譆 噫同いたみよばはるやうな事

悼 人の死するをかなしむ事

悵 思ひをそろゝ意あてはめたる事がはづれてほいなく殘念に思ふ事

慟 哀のすぎて悶絶する事

弔 氣のごくに思ひその心をなぐさめる氣味

イカル

怒 はらを立てきつさうのはげしくなるやうすの事

恚 ふづくむさ訓すむつさする氣味うらみをふくみゐるゝ事

慍 いかる事はらが立てたまられぬ事

忿 はらを立しんきわかす事うらみいかる事

懟 いかりすれる氣味氣にくはぬ心もちの事

瞋 憤同目をいからしにらむ事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嗔 聲をいからせしかる事

嚇 以レ口拒レ人をと注す聲をあげしかる事

イキドホル

憤 心に通ぜん事を蘊積して志を起す事

懣 煩しさつゝく心の中にたまられぬ氣味

イフ

日 口より聲を發してものを云ふ事故に口は口にかたどり中の一は聲にかたどる

謂 其人に對して言にあらずして其人を評し云事又事をさして云

道 言と同して少しく異なり一は其わけをいゝきかす氣味

イユ

痊 病ひ除きて元氣に復し常體になつた所

已 もはやさつぱりとなつた事

イヤシ

卑 尊の反いやしき事下品なるを云

陋 もと膽の狹小なる事一室一巷のるい

俚 雅の反俗にげびたと云事

猥 やうすのいやしき事犬聲

イタル

至 往てその所にかゝるを云ふ

臻 四方よりあつまりよる氣味其所にいたる事

達 其所までゆき達する事

詣 もふでると訓すいたりたつ氣味

嘸 にわかに大聲あげてしかる事又笑聲

㤝 いきどをりを含で口に云はざる事

悶 同上

言 口へ出して其意をのぶる事心の聲とも云ふ

云 以前の事をときあげる事尊者に向てもうしあぐる意なりうはさの氣味

稱 それを稱揚して言ふ事それにかなふやうに云事

愈 さつぱりと平愈した事癒同

賤 貴の反位のいやしき事閒戈事レ其こだくさんなる事

鄙 都の反やうすのそぼうにして下品なる事

野 朝の反草などのをひしげりたるやうな所

到 其所までゆきおよぶ事

造 をしかけろ氣味、すゝみいたる事なり

底 ものゝそこまでゆきまはる氣味

イサヲシ

功 そのしはざのしるしあつて人の目に見ゆる事

イノル

祈 心に持たることをいのりて助をもとむる事

イマシム

訓 をしへいましめて身につゝします事

警 前に氣のつくやうにいましめさとす事

イヨ〱

愈 いやがうへになる事

イヌル

寢 ねどころにはいりて臥しいこふ事

瞑 まぶたのふさがり合ふ事

イハンヤ

況 ましてと云事、彼を此にくらべてみればかれにも其通なるからは此に於てはまされりと云氣味

ウ

ウルハシ

美 惡の反みごとにうつくしくしく愛すべく賞すべきの意

艶 容色のうるはしくて人の心目を移うやうなる事

妍 妍同好美にして媚ふの意なり

娟 すがたのしなやかなる事多く形容に用

ウツル

移 うつしてあちらへつける事移レ民衣服のるいをうつす事

遷 上同こちらを去てあちらへやる事

ウラム

績 麻をつむぐ事その如くわざをつみて事をなす事

禱 加護を求め福を求むる事

誡 戒同いましめつげて心に持たせる事

彌 むしやうにひろがりわたる事

寐 目とぢふさがるときは神氣をさまるを云

矧 同レ上矢の弓に從ひ急に進く至る如くすみやかなる氣味いふに及んやの器

麗 美とは少しくかはりて形色のうるはしくだてなる事

好 かほよしと訓すがんしよくのうつくしき事

孌 美好の貌やさしき事

妖 艶にして媚ふるの意なり

徙 一レ日一レ月のるいやどがへの事

映 月の水にうつり己のかたちのなりにみへる事影のうつる事

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

怨 恩の反人のしむきのあしきを心よからす思ひうらむ事
憾 ゆきとゞかぬを思ふて殘り多き事、中庸に見ゆ
惋 心あてのちがふてなどろく氣味
唧 心に其事をふくんで忘れずになる事

恨 甚だ殘り多く思ふ事
慊 不足に思ふて忘れぬ事
懟 うらみいかる事
寃 むしつをうけてうらむ事

ウカヾフ

窺 ものゝうちよりのぞきて其樣子を知る事
候 ためらひうかゞひまつ氣味
覗 物のこかげよりそうさうかゞひ見る事
闞 物のひまよりひそかに伺ひみる事覦同

伺 こちから行て向の樣子をうかゞひ見合事
覬 向のひまを見て伺ひとらんとする氣味
偵 犬を入れさぐりうかゞふ事
閒 ー諜と云て向のものに立交て敵のやうすをうかゞふ事

ウカブ

浮 水の上にうきたる事自然とうきあがるもの
汎 風波にまかせ流れてさだまらぬ事ー濫とつゞく
漾 うかみたゞよふ事

泛 水のうへにあつてしづまぬ事うくつり合をもつたもの
泳 水中をくゞりゆく事
漂 たゞよひうかむ事

ウバフ

奪 むりにうばひさる事
褫 衣服をはぎさる事

簒 向にあるものをひつたくる事

ウタフ

歌 謌同喉にて聲をしらべる事
嘔 歐と同はなうたをうたふ事
謠 ふしをつけてうたふ事
詠 一字を引のばして長くうたふ事

頌 其盛德を形容してほめ並べる事
嘯 口をしぼめて聲を出す事くち笛をふく事
謳 聲をとゝのへてうたふ事
誦 そらよみする事

ウルホフ

濕 しめりうるおふ事

滋 ひたしてふやかす事まし長ずる事

潤 にと〱としてかはかぬ事汁氣をふくみてにつとりとしたる事
沾 水にぬれる事きはすく氣味

濡 ぬれて水氣あるを云
漸 水のじゆく〱ひたす事次第にうるおふ事

ウツ

擊 手をもつて物をうつ事
撻 肉にこたへるやうにたゝく事
皷 たゝくにつけて向にあるもちまへの音がでゝくる事

打 从レ手从レ丁は物をうつ聲なり
拍 手をうち合す氣味兩方からうち合す事
敲 たゝく事たゝきてくる事

ウレウ

患 行末を思ひめぐらしてあんじはづらふ事
愁 かなしみあつて心のうき〱せぬ事
惆 かなしみあつて心ならぬ事
忡 胷一はいになつてくる氣味

憂 くろふになる事
悄 心さびしくなる事
愀 うれひて顏色の變する貌愀然作レ色
⿰忄冬 いたみを心にわすられぬ事

ウヱル

植 うゑたてゝをく事ー其杖而芸たてる事
栽 樹木などをうゑこむ事

樹 たてばやしにしてをく事
種 しきうえてはゑさせる事又根つかす事

ヱ

ヱラブ

撰 譔同えらみてのぶ事獨手にてえらぶ事
掄 品をわかつてえらぶ事

擇 えりわけてそろへさる事
選 數多あるものゝうちにてよりさる事

ヱダ

朶 朵同樹木のたれてさかりたる貌
條 幹よりまたになりてわかれたるものを云

枝 木の幹よりわれたるまたの事

ヱガク

畫 その形をゑにうつさる事

繪 五色にいろさる事

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

エタリ

得 それを我手に入れる事

獲 それをとつてわがものにしたるえものと云意より轉ず

ヲ

ヲモフ

思 内外その筋にちがはぬやうに心をつけて工夫する事

懐 そのことを心にこめておもふ事

憶 心におぼへて居ことを思ひ出す事

謂 おもひをいれる氣味にして云事

念 常に心にものをさめ念頭にかける事

想 その形相を心にをもいやる事

惟 發端に用時はその思ふを下に云そればかりはかうと思ひる事

顧 ふりかへりて思ひみる事

ヲゴル

奢 衣服宮室何にても美れいをこのみ表をはる事

侈 約の反はりひろげる事表をはる事

驕 憍同謙の反心の満て高ぶる事

倨 禮法にこへて人に高ぶる事

傲 驁同人を見下しかろしめる事

ヲコタル

怠 氣ぶしようにしてはりのなき事

惰 物をうちやりにしておく事

嬾 懶同ものうしの部に出

懈 ものにせいの出ぬ事心のだらけるを云

慢 物をむちやにしておく事

勌 倦同つかれてぶしやうになる事

ヲサム

治 それをせはしてそれ〳〵の所をえさせるやうに取あつかふ事

納 外より來るものをうけいれおさめる事

藏 たくはへかくし人のみぬやうにしておく事和し蔵いれおく事を云

斂 あつめて一所によせておさめおく事

理 そのすぢを見てその道にとりあつかふ事

修 脩同下地の道をおさめつゞけてゆく事しゆふくの事

收 外にあるものをおさめとりて内のものにする事

ヲフ

追 にぐるものゝあとよりおふ事おひつく事

邅 くる〳〵めぐりておいゆく事

驅 馬にむちをあてておいたてる事

逐 あとをしたひつけゆく事ついきてあとからゆく氣味

趁 趂同おつゝきてゆく氣味

尾 そのあとについてゆく事

ヲシム

惜 心にをしく思ふ事

悋 しはき事、女のりんきする氣味口のうちでぼやく事吝同

嗇 にぎりてはなさぬ事しはんぼの事

慳 ちび〳〵と物をへづる氣味だしおしみする事

愛 もちたるものをはなしにくがる氣味

ヲカス

侵 いくさをひそめて其領分へ入こむ事

犯 法をふみすにつゝかしてはく氣味

浸 水の物をひたす事

冒 かぶり物をして向ふみずにつゝいて入事

ヲワリ

終 物事はまりてつきてしまふ事事の仕舞を云

畢 さにはまりつきてさつぱりと仕舞の事

了 さつぱりと埒のつく事

卒 物のはてのつく事大夫死曰卒しまいのついてなはる事

訖

竟 向ふまでわたりてとゞまる事

オホフ

掩 手を以ておほひかくす事

蔽 目の前によこたわりふたさぐる事

蓋 上からふたをしてみえぬやうにする氣味

覆 上からかぶせて中にする氣味

ヲモムク

趣 そのぐはいを以てそのこころにもちかけゆく氣味

赴 そのつぼへぐはいよくもちかける事

趨 あんばいやうそのところにはしりこむ氣味

致 そのすぢへあんばいようもちこむ氣味

ヲドロク

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

驚 をそれあはてる事、さてはと思ひをどろく事びつくりさする氣味
愕 噩同不意に出合ておどろく事
駭 はいもうしをどろく事
慌 をそれあはてゝ心の定まらざる事

ヲコル

作 しんきにつくりをこす事 つくりたてる事
發 うちにあるものが外へむつき出る氣味
興 下地よりあるものをさり立をこす事
起 こけてあるものを引をこし立つる事

ヲソル

恐 心もとなく思ひきつかう事 又うたがひはかる事
怕 こはくきつかはしく思ふ事
慄 ちゞまり上る氣味 ふるいをそるゝ事
懦 氣の弱くしてあぶ／＼思ふ事 をそれあはてる事
怯 心のおくしておそるゝ事 おく病なる事
惶 あはてまどふ事
懼 をそれ用心して巳來をきつかうきみ
惴 こは／＼さくりゆく氣味、をそれてこゝろのちいさくなる事
悸 をそれて弱氣の付てくる氣味 むなさはきの事
慴 をびやかされてをそるゝ事 それをこはがる事
怖 こはく思ふておそるゝ事 おのゝきふるふ氣味
畏 心にをそれつゝしむ事

オホシ

多 小の反大にすきてあまりある事
夥 おびたゞしさ訓す 物のめつたに多き事
剩 むだに餘計のある事
衆 三人爲レ―生類のおほき事

オクル

饋 食を貴人にすゝむる事 又をくりものにする事
遺 かたみの物をおくるに多此字を用
遣 おくる事 おくりてつかはす事
貽 のこして子孫のためにする事
餞 送行の燕と云て旅立人に物をおくる事
送 族へ行人にはなむけをおくり見立る事
贈 をくりやりて向のものにする事
賂 我が願の通するみちのつくためにおくる事

カ

カナフ

協 和合する事互に心のゆき合ふ事
適 そのよろしきを得てできとうする氣味
稱 秤のおもりのつり合よくさまる事 ほどよくかなふ事
合 そのぐはひのよくうちおう事
叶 協古文 わりよくあふ事
符 兩方からもちよりて合す事

カヽル

懸 ぶらりとちうにかゝる事
掛 桂同こちらの物がそれにひつかゝりてとまる事
繫 むすびつなぐ事
罹 離同物がきてそれにかゝる事
係 それにつながれてのがれぬ事
絓 こちらの物がそれにひつかゝる事

カサナル

重 その上にかさなる事 いやが上になる事
層 重屋と云てその上にもひさかさされある事
沓 かさなり合ふ事 いれこにする氣味
疊 たゝみかさなる事―衣のるい
累 あるが上にだん／＼つみかされる事―卵
申 言語をくりかへし打かされる事

カハル

變 有ものゝだん／＼その形もやうのへんじかはる事
代 人の代をする事、子が父のあとをつきて父の代をする事
換 此を彼に入かへる事 變化の變に非ず
化 本なきものが其形もやうができてだん／＼かはりゆく事
易 一事一物のかはりへんずる事 又彼と是と取かへる事
替 物のすたりかはる事 古書には廢の義に用

カヘル

歸 かへつてその所におちつく事 婦人の嫁を―と云
返 もとの所へもどつてくる事
復 したゞのさなりのものになる事―古
旋 ぐるりとめぐりかへる事
還 ぐるりとめぐりてもとの所へかへる事
反 もとへもどりくる事 ひつくりかへる事
囘 ぐるりとめぐりてもとの所へかへる事
郤 却同をしかへして受ぬ事 しりぞきとめる事

カタチ

形 なりかたちのかまへある事
象 象同獸の名中國の人しらず但その圖を見者似たるを以云
狀 そのやうすありすがたの事 そのもやうをけいやくする事
貌 そのなりかつかうなり

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

姿　そのすがたのおくゆかしきやうす
容　かたちつくりしていれらるゝことを求む氣味
態　そのなりふりのやうすある事、情一、嬌一
質　形の質の出來て目にあらはれ見る事
體　心のわざはたらきをうけてもちたるやうすを云
像　形像のよくにたる事

カタル

語　人に對して論談する事口より發して聲にあらはるいゝかた
談　る事
話　人と相對してはなしする事

カクス

隱　かげになつてこちらのかたへみえぬ事
匿　をさめかくして人の目にかゝらぬやうにしておく事
藏　其中に入てたくはへおく事
潛　水にひそむ事水中の魚會は魚のかくるゝ所

カザル

文　小人の過必すなもてなさりつくろいそれと見せぬやうにする事
飾　そのやうすにたかうてかざる事
華　人の目につくやうにだてなる事
裝　よそなひかざる事、行一はたびしたくの事、又椀に物をもるを一と云

カツテ

嘗　むかしと云事こゝろむるなむるともよむ
曾　歲月をへたる久しき昔の一故に經る意をおびたり不料の辭
常　今はじめてこの事あるにあらず以前よりと云氣味平生の事

カヘリミル

顧　ふりむきてみる事たちかへりておもふ事
眄　かほをふりむけないめにみる事
眷　かへりみおもふ事あさへふりむきみる事
省　其事を行んとして氣をつけ念を入れしらべみる事

カスカナリ

幽　目にかゝらぬやうすになつてある氣味
邃　深邃にしておくのやうすの見へぬ事
微　微小にしてみえがたき事
眑　向の遠くして見へがたき事

カゲ

景　日光のうつりゆく所を云
影　物のかたちのうつるを云
陰　日景のさゝぬ所
蔭　樹木のしげりたるかげを云

カフバシ

香　その香氣來て鼻につき心に交る事
芳　その香氣の立てあるあたり、もと香草名
馨　その香氣きこへて鼻につく事
郁　にほひのこき事
芬　にほひのそこらにしきみちたる事、花草の香氣ある事
薰　香氣物について來る事
非　菜色香氣の四方にさびたつ事、又うすき事
馥　香氣の物につくやうすを云

カンガフ

按　それをさくさおさへしらへてかんがへる事
校　それをならべくらべる事
參　その中にまじはりてかんがみる事
考　その來るあんばいをさくさ氣をつけてみる事
勘　そのあんばいを引合かんがへる事
稽　それに心をさめてはかりみる氣味

カナシム

哀　それを氣の毒に思ふてみすてかたき事
悽　心の内にものかなしくおもい感する氣味
悲　わが思ふたやうにゆかぬをいたらしく思ひかなしむ事

カナ

哉　嗟嘆の意時哉のるいやは疑ひもさく意あり
乎　咏嘆の辭又疑ひ問ふ辭又かともやともよむ
夫　かな吾知レ免夫哉に似てやゝかろし又かともよむ

近作二題

米　文　鄉

◎祝耶蘇降誕日

十九世前猶太東。靈神一夜降二蒼穹一。無レ究大業三年卒。不朽徽音六合通。道德幸逢二全盛日一。經猷共是太平風。懇懃耕二穢心田蔘一。遮莫生レ於二荊棘中一。

◎甲午新年御題三首

靄々風物惱二幽思一。春至梅花人未レ知。薄暮偶過二山下徑一。寒流倒レ影兩三枝。

榮枯過レ眼感二年華一。春早湖山處士家。取二次水仙寒菊後一。先レ花々是殿レ花花。

絕レ塵高格本天眞。豈競二百花嬌艷新一。最是勁風殘雪裏。向レ陽竹外獨占レ春。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つれ〴〵草

友なし猿

みむろのや

友なし猿といふは、我そふりゆくを詠みてし新玉の春の朝より、いそがれぬるとかいひけん年の終りに、まつどもとぼして走りありくをよそに見なして、片山里に世を忘るゝすさびにと、梨園のすねもの市川白猿が牛島の籠居にかいつけたるなりけり、みちのくへ黄金もとめにまかてける慾のほそ道に、

茶店の老女かきぬたの槌を枕として

　　きふこゝにきぬた枕や秋の風

などいふもをかしく、身を戲塲の中におきて心を風月山水の間にたどらせし其人の風情も思はるれど、殊にをかしきは其ひとり言といふものなり、左に一二をかいつくべし。

折ふしのうつりかはるにつけて、小袖なんどの染色さへ、紫のはやり行く時には紅もおとしめがちに、藤色の時めく頃には、もえぎは古代なりなど思ふこそ愚なれ、これらは唯折にふれ時につけつゝ移り變りゆくかりそめとなるを強て時におくれじとの心づかひこそむづかしけれ。

萍に遊ぶ螢はいざりの舟かとしほらし、きり〳〵すの臑の細きは夏瘦のまだなほらぬにや、蝸牛のおのが舍を引ありくは長明のみやび慕ひぬるか、又みのむしの引つくろひしもみぢばは錦をかざる古巣ならめといとをかし。

芭蕉翁の句に、猿橋や蝶も居直る笠の上」といへるあり、此句なかにも感殊に深し、虛をもて實情を感ぜしむる事凡人のわざならず、傾城にくらべたらむには高尾うす雲か上にたつべし、朝起にとりては我祖父と肩をやならべけん。

めしつかふ男のひろげ食ふを一間に閑居たるに、一人のいふやう、凡て人間一生の食物は天よりうけえて生るゝなれば、大食すれは早く其分量を食ひ盡す故に命短し謹むべしと云、時に又一人がいへるは、否さにはあらじ、命は食にありといへは大食して暮すこそ本意なれ、とかたみに爭ひおへり、これなむつれ〴〵草に月と露を哀れと論ぜしよりも、今ひときはまさりてみやびたる爭なりし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

去一年間万國婦人の進歩

試みに、一百年前のロンドン、タイムス新聞（千七百九十七年七月十八日紙上）を見よ、其雜報の一節に、

去る火曜日には、屠牛者某、スミスフヒールドの市場にて妻を賣物に出せり。腰に帶を束ね欄干に縛り留きぬ。一人の牛逐ひ之を三ギニアークラウンの直段にて買受たり。

とあり。更に、太甚しきは、シエクスピアが名高き院本中の人物ペトルーチヲが言ふ所ろをきくに、

妻は、わが什器なり、家具なり、
家なり、造作なり、
田畠なり、小舍なり、わが隨意の所有物なり。

か丶る見識の婦人論を以て、試みに、去一年間の万國婦人の進歩に比較せよ、

プリン、モウ女子大學は、千八百八十五年（十年前）の秋開校せしに、當時學生たゞ四十四人なりしが、今は二百人以上あり。塾舍滿員の故にて謝絶せられしも亦多し。

チウリツヒに於ける万國社會黨の總會議には、歐洲各國より女子の代表者出席し、就中、或る公會の一ツには、婦人主會となりぬ。

シカゴの世界博覧會開會式の折には、聽衆十二万五千人の前に於て一婦人演說し、又、婦人館の設計を爲せしとて賞牌を得たる婦人あり。

同じく宗教大會議には、世界十大宗教の代表者出席せし中に婦人も亦た列席し且つ演說したり。

同じく、宗教徒の大會議に於て、女子は演壇に立てり、之れ宗教の歴史に於て未曾有の事なりとす。

カンサス、及、コロラドの兩州にては、其憲法を改正し、女子に男子同樣の投票權を附與したり。

ミシガン州にては、女子に市政投票權を附與したり。

ニウ、ジーランドにては、未婚既婚の別なく、總じて女子には男子同樣の政權を與へたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

七十万の會員より成立つ米國勞働協會に於ては、女子參政權に同意する旨告白したり。

世界大博覧會の節催ふしたる女代言人の第一總會には、米國より出席せしもの一百十人あり、此内ち州又は領の裁判所に三年出勤し公私ともに不都合なくして大審院出席の權利は得たる女代言師八人ありたり。

米國北部の諸州には女子の製藥師多くあるとなるが、イリノイ州のみにて一百人ありと調査せらる。

米國に自轉車のりの婦人三万人あり。佛蘭西には一万人ありて内九千人は主府パリにあり。近頃ろパリの都にて自轉車結婚を催ふせし人あり、即はち自轉車にて敎會にゆき、又宴席に出でしとなり。又一人の佛國婦人は、一時間に十七英里半の遠乘を爲すとぞ知らる。

猶太人の中に、敎會内にて女子に同樣の投票權を與へんとする氣運大に熱し、之に運動するもの出づ。

一人の女宣敎師は、神學博士（Ｄ・Ｄ）の學位をうけたり。

桂の雫（東京案山子の舍月並會）

待鶯（兼題）　村松鉞三

、冬こもる谷の鶯來なかなむ野邊の梅か香匂ひそめけり

市村高彦

、、夜はあけぬ小雨は霽れぬ我山のかすむあたりに鶯もかな

高原照彦

、昨日今日霞そめたる野邊見れば先鶯の聲そまたるゝ

湯谷礎一郎

山里

、我宿の筧の冰とけ初ぬひかれて來なけ谷の鶯

津田元親

、梅さきて去年の巣立ちの鶯も待たるゝ春に成にける哉

津田氏根岸に移られしより未だ一度も行かず今日また待鶯てふ歌題をさへ送られて招かれたるとのたしさよ

北里闌

、、鶯の初音をまつの下庵は根岸の里の何處なるらむ

評。おもしろし

津田元親

かへし

、、鶯の初音のみかは梅の花のかほれる宿に君をこそまて

評。いよ〳〵おもしろし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家梅始開　（當座）

村松

、我宿（窓）の梅の一本咲き初ぬ今朝たつ春のしるしはかりに

評。上句は一本全躰には多く咲そめしやう也下句は枝先にひとつふたつ咲けるやう也

市村

、我まとに影さす梅の一枝は半（開）折れながらに咲初にけり

高原

、朝戸出の袖猶寒き我庭に匂ふもゆかし梅の初花

湯谷

、山かけの梅は咲ぬと此の朝け先吾妹子をよひにける哉

津田

、咲そめし梅の一枝は吾妹子に先つ贈らんと手折りつる哉

柳のもとに處女たてり（以下探題）

村松

、春の野（道の邊）にてまりつくなる處女子か袖ふてたるゝ青柳のいと

評。今のフートボールはいざしらすむかしふりの手まりは堅地にてつくもの也そは草原などにては反動せざれば也假令春の野に出ろとも手まりは携へざる可し

鴫みだれて飛ぶ

高原

、あし鴨の亂れて立てる蘆間より舟のへさきは見え初にけり（そ・る）

舟中見島

市村

、嬉しくも舟の行くてに見えにけり心あてなる島ならねとも

小督局

津田

、身にしみて猶聞えけり仇し世のさかの奥の松風の聲

春汽車

湯谷

、打わたす遠山本を行く汽車の煙の末は霞なりけり

評。實景見ろが如し

東京社中諸君の詠今の世東京にいづる歌の餘韻なきには似もやらでいと見ゆかしきを見て

點者　池袋大人

我園の梅はいよ〳〵かをらなむ
冬枯はてしむさしのゝ原

◉女學雜誌第三百六十一號　燃るが如き熱情を以て高潔なる理想を説く、行文悽惋、用筆雅健、その愛を説き恩を語る、眞に我心を動すものありその信仰の上に於て余輩さその所信を異にするにも拘はらず、余輩は毎に女學雜誌の好文學を歡迎するものなり、本號は本年の初刊にして十六頁の附錄を添へたり載するに嚴川公の輔儲訓、さよ子女史の『こむすめ』、花圃女史の『なふじき』、非に隨筆數則を以てす、この二女史の短篇小説は左まで感心せざれども輔儲訓は眞に是れ精金美玉、隨筆中には最も余輩の心を强たるものあり、他日本紙に掲ぐべき『會心抄』中にその一二則を收めん（一月十三日福井新聞）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

交詢

○商界にて學問したき人の問

拜啓仕候益々御清適に奉賀候小生は昨春來故郷を離れ當地の一商店へ勤務罷在候ものなるが兼て尊下の御高論は評論女學の兩紙上にて拜誦罷在候今回女學雜誌三百六十號『年の暮に春を想ふ可し』の一篇を通讀し尠からざる感じを惹き起し申候元來小生は申すも耻かしき事ながら總ての事一時に度外の熱心を起し全力を注射して從事せんと決意する間もなく今迄の熱意は何處へやら終に全く冷靜に全く飽き果つるの性質に候是れ迄種々なること思ひ立ちし事も候得共多くは成功を見ずして打捨て現今は唯些少なる商務を爲すの外益なき事にて毎日を過し居候然るに今度女學紙上尊下の懇切なる敎訓は小生既往の生涯に大なる警醒を與へ今新年の始めに於て本年中に專修すべき一個の課目を定め眞に誡心して極力成功を期するの決心に御座候

先づ小生の撰び候ものは經濟學に御座候然れども初學の事にて如何なる書に依り如何なる順序に依りて學ふ可きや全く不案內に候へ者何卒書名發賣店等御敎示被下度候且つ經濟學の外小生如き年若き商業者に取り有益なる課目も候へ者一同に御敎示被下度願上候

淋しき旅の空に在り他に問ふべき知己も無之候へ者斯くは御多忙をも不顧尊下を煩し候御宥し被下度候草々

一月七日　　大分縣大分町　　則光千代吉

答。經濟學を簡易に學び候には、天野爲之氏の經濟學が宜しかるべく、其上精しく研究するには、同氏譯ミル經濟論宜しからんか。何れも府下彌左衞門町經濟雜誌社にあり、左れど、經濟學とは、政治上の經世濟民の術に有之、申さば大仕掛の工夫にして、一家一身の入用には少しく緣遠く、政治家として一國の經綸に用ひ初めて十分の効驗あるものにて候。況んや、舊派經濟學には、道義を重んずる輩に於て、甘服しがたき立說多く、之のみにては、處世紀律の案內にいたしがたし、亦又新派經濟學をも知ると肝要にて、之には、丸善書店に出版せし佐藤昌介氏

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

譯伊氏經濟論など宜しかるべく候。然し實際直接の經濟學を爲さんとには、讀書には先以て東京經濟雜誌購讀位ひにとゞめ、平素專ぱら眼前の商況、近邊の活取引に注目し、身を立てたる先輩の經驗、古老の實際ばなしなどを謹聽し、尙且つ常用を儉して幾分の貯蓄を爲し、之を用ひて追々少々づゝの商ひを試み、損をしたらば月謝を拂ひしと思ひ、もうけたらば試驗の褒美を得たりと思ひ、漸次着々として實地に經濟の極意を學び玉はんこそ、尤とも適當ならめ。

人生、書を讀まざれば、愚となる。左れど、讀むべき書は、文字にて書きしもののみには限らず候。眼前直接の事實を活かし、之より大切なる教訓を學得する工夫のなきものには、たとひ書籍を讀みたりとも、實用の働らきは尠なきものに候。故に、實地商業に從事する人が其の業務に益ある學問を成さんとせば、先々其職業にはげみ、之に關係する出來事を仔細に研究し、其の景況又は新工夫などを記載したる新聞雜誌に注目するなどが、第一の學科に可有之、其上餘暇もあり經驗もつみて、而しての ち追々高尙の所ろに入るべき筈と存じ候。

左れど、身、商業に從事すとも、別に一市人として心得べき學藝あり、又一人間として覺悟すべき德行あり、此等は、普通の學問、普通の修養として、いとま〳〵に必らず修むべきものに有之、其の商たると工たるとを問はず何れも皆大切なるものに候。此の普通の學修の事は前述せしものとは異なるとを御承知ありたく候。

書架

象山先生女訓　　しづか

是れ佐久間象山先生の遺著、婦女の訓誡に關する者なり。靑木直隆氏先生に師事したる折、傳へられたるものなりと云ふ。此度上梓せられて文昌堂より發賣す。本文僅かに三十二頁の小冊子に過ぎざれども、有益の文字なるは、言を俟たず。卷末に先生の小傳を載す。著者靑木貫之進氏の筆になる。又以て先生の一班を知るに足らん。

象山先生は、經國の才あり、抜群の識あり。兼ねて村里の婦風に心を用ゐ、子守歌を作られ、婦人を敎ゆるに、此女訓を著はさる。古より英雄の意を用ゐる、洽し周到なり。

余曾て白河樂翁公の修身訓を讀み、婦女に關する敎訓の全く儒敎より來りしことを見たり。本書も亦其感を惹起さしむるものなきにあらねど、一言一句、實驗に出で、何時の世にも婦人のをしへとなるべきものと知らる。思ふに德川時代の婦女訓は、悉く儒敎を根基としたるものなれども、儒敎主義の女訓必すしも、棄つべきものにはあらず。今日と雖も或一部を外にしては、所謂上等社會の如きもの、皆舊習慣によるものなり。象山先生の敎訓は、如何なるものなりしか、左に一二節を摘錄して、未讀者に紹介せん。

「たゞ女の、いかに、こゝろひろく、わきまへたりとも、物しりがほにさし出て、もしことばなどいひ、侍るは見ぐるしく、にくげなり。すべて、よそ人に、むかひては、内ばにして、むさと、したることをいはぬ、ものとしるべし。女の心あら／＼しく、はらたつまじき事にも、はらをたて、をかしからぬことにも、けしからずわらひ、さはめき、わが心にあはぬ、ときは、人をそしり、よきこと、あしきことに、つけて人のうへをのみ、いひさたし、いはれましきことをも、くちがましくいひのゝしりはいとも／＼げすげすし、かゝる、ふるまひの侍れば、いかに、すがた形、うるはしく、才能ならびなくとも、心ある人は、うとましく、おもふなり。つゝしむべきのきはみとしるべし。

「みめ形は、うまれつきなれば、よきも、あしきも、かふべきやうは、あられど、身のわざ、こゝろの、たしなみは、その人の心に、したがひ、いにしへのかしこき人にもなほ及びぬべし。

「きものゝ、したて、なつ、ふゆに、よらず、れんを入るべし。身あまり、ひろくすぐるは、みなりあしきものなり。すこし、せばき、こゝろもち、よろしからん。かたのゆき、そでのした、みじかきは、いやしく、又ながすぎたるもいなかめきたり。身のたけは、ながきを、こそ、よしとすることなれ。もやうも、いろも、ずゐぶん花やかにて、しかも、じんじやう、なるよろし。はやりに、したがふは、いやしきなり。殊にわざなき、まひ子、などの、しだしたらんをば、いかに人はもてはやすとも、おのれの身にはあるまじき、ことにおほして、きたまふべからず。すべて、おとなしく、くらゐあるやうに、したてらるべし。にほひとむるもふかく、とむるはよろしからず。かけ香も、しつこく、あまへたる、あしゝ。そうじてものずきに、まかせて、おごりがましきことは、ゆめ／＼あるべからず。

「いにしへのをしへにもをとこは、外ををさめ、おんなは、内を治むるとも、侍れば、をつとの、家法にしたがひ、内むきのことに心をつけてそのとりしまり、はふ、あらんこと、もとよりさるべきことには、侍れど、めしつかふ、ものども、うれしく、おもひ、いつまでも、かげによらんと、たのむやうに、なさけ、ふかく、おもひやりあつかふるべし。女のあつかひ、あしきによりて、をつとまでを人に、うらまするこそ世にまゝあることなり、つゝしむべし。たとへ、よろしからぬ人たりともなさけ、ふかく、めしつかひなば、かならずようにたつことあるべし。

「人をつかひ侍るに人ごとに、その身のえたるところえぬところ、たがひにあるものなれば、人をば、それ／＼に見あはせて、つかひそうじて、わが、こゝろのごとくなるものは世にすくなし。人々の、かほかたちのことなるも同じことなり。さればめしつかふ、うちのもの、すこしのあしき、ことあればとて、こゝろみじかく、しかることよろしからず、ましてはなく／＼しく、追ひ出し、なさせんは、いかゞなり。おほかたのことは、ゆるして、つかひはべるべし。

其他、髮の結樣、道あるく樣にいたるまで、一々實際に出で、百世動かすべからざるもの。老練の婦人ならでは、知るまじき程の細々の心用ゐ、感嘆の外なし。

片々

○成瀬仁藏氏

新潟女學校の成瀬仁藏氏は、昔し梅花女學校の創立者なり、近日澤山ボウロ氏が傳の著者たり。三年前、女學及び慈善の景況を取調べんとて米國に留學せられしが、去十四日恙なく歸朝せられたり。

○園ラル女史

米國の諸新聞紙上に其名さわがしかりし園ラル女史も亦歸朝ありぬ。所謂る、日本女性の改革者たるや否やは、今后その實行せらるゝ所を見るの外なし。

○田邊花圃女史

歌人中島うた子の高門弟たる田邊花圃女史は、師のすゝめにより、鳥尾子の令孃と力を合せて此度び新たに歌門を開かる。女史が眞本領は短歌にして、幼時早く秀吟あり。今此天才を斯道の敎授に得たるは、祝すべきの至りなり。

時報

◎學校教育

●小學教育費國庫補助の要旨　國立教育期成同盟會が次回の議會に於て小學教育費國庫補助問題の遂行を期せんとする由なるが其要旨と云ふを聞くに左の如し

小學教育費國庫補助の要旨

小學教育を國家事業の要部に置き國庫より其費用を補助するは文明國一般の通法たる事◎本邦小學教育費は學制頒布以來國庫より補助し明治十四年まで繼續支出し來りしに一時政府の都合によりて之を廢絶し今日に至りては其費用を擧げて市町村の負擔に歸せしめたるものなり故に政府は小學教育費國庫補助復舊の責に任ずべき義務を有する事◎小學教育費國庫補助費は全國一般學齡兒童就學奬勵の目的を以て之を各市町村又は學校組合に配布するものとし其金額は逐年增加して結局三百万圓に達せしむる事◎本案は全く國家問題に屬するものとし政派問題の外に置くべき事

●群馬縣の子守教育と夜學　群馬縣南勢多郡前川村大字深津村小學校教員松村常吉、田所石濤の兩氏は先頃より子守教育を創め當分修身、讀書、唱歌を課し教場は一時同地の小學校を假用し教具は有志者の寄附金を以て買ひ調ひて一切貸與することゝなし毎日午後三時より二十三四名の子守を教授しつゝありと

●生徒の父兄への通知書　信濃國上伊那郡高遠學校にては先頃生徒の父兄へ宛て左の通知書を發したりと

凡そ教育の道は學校と家庭と相聯絡して共に力を盡すに非ざれば得て其効を奏すへからざるものに有之候依て本校は父兄の注意すへき諸件及生徒心得を列擧して諸君の反省を煩はし以て諸君の最も親愛せらるゝ生徒諸子の教育を誤らざらんことを期し茲に及通牒候也

年　月　日　　高遠尋常高等小學校

父兄心得

一、欠席、遲參、早退は教授上の不都合、本人の不爲、經濟上の不利益なれば萬已むを得ざるの外決してあらしめざること

二、祭典の正月、盆、五節句其他郷村社にも非ざる小祭等には決して欠席遲參、早退あらしめざること

三、家事上已むを得ず欠席せしむる場合と雖も出來得べくんば一時間にても出席せしむること

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四、欠席、遲參、早退をなさしめんとする時は書面又は隣家の生徒へ其旨を委托し學校へ通知すること

五、尋常小學校は國民教育の基礎なれは學齡兒童には必ず尋常科を卒業せしめさるへからす又高等小學校も一旦入學せしめたる以上は可成的中途退學せしめさること

六、學科の復習は最も必要なるものなれは歸宅後少なくとも一回位は復習せしむへきこと

七、教授用具は豫め學校より各生徒に通知すへきに付速に調達せらるへきこと

教授用具
- 尋常科｛讀本、習字帖、作文帖（二學年以上）筆記帖（三學年以上）石盤、石筆、拭もの、筆、墨、硯等
- 高等科｛讀本、習字帖、習術帖、（二學年以上）筆記帖六冊（修身、作文、算術、地理、歷史、理科、石盤、石筆、拭物、筆、墨、硯、鉛筆、消ゴム、習字用紙（中折）圖畵用紙（厚洋紙）等

八、衣服器具等は質素輕便（男生衣服は筒袖を可とす）を旨とし調達せらるへきこと

九、生徒所持品には總て（尋常科、高等科）第何學年生　何　之　誰と記載せらるへきこと（若し記載し難き物品あるときは木札を附すること）

十、登校に就ては辨當の外食物は勿論其他金錢及現界品等は決して渡さゞること

十一、辨當を持參せす又晝食の爲め歸宅せす終業迄學校に在るか如きは衞生上頗る有害なれは斯ると決してあらしめさる事

十二、雨摸様あるときは雨具を持參せしむること

十三、學校の事に就き生徒の陳述不審なれは遠慮なく書面又は出頭の上事實照會せらるへきこと

十四、餘暇あるときは出校の上生徒の擧動及教師の監督等視察せらるへきこと

十五、生徒の品行上再三訓戒を加へ尙ほ改めさるときは其事情を通知するか又は父兄の出校を煩はすことあるへきに付心得置かるへきこと

十六、每月皆勤證は其翌月初に於て皆勤生徒各自に附與す可きに付若し持參せさるときは直に申越さる可きこと

◎美談

●行賞　秋田縣羽後國南秋田郡土崎港町本城谷いさ女は稟性從順幼より能く養父母に事へて懈らす殊に養父及夫の病に罹るや夙夜看護に盡し其歿後益節操を勵み能く養母の意を迎へて歡待し傍ら實業の家計を處理する等多年の志行洵に奇特なりとて金三圓五十錢下賜又同秋田郡羽後國由利郡鹽越村伊藤常吉佐々木辰藏金卯三郎の三名は明治二十六年十一月二十日由利郡鹽越村海上に於て漁魚中暴風激浪の爲め同村森彌吉外二名乘組の漁船顚覆し死に瀕するを認め戮力救援候段奇特なりとて木杯一箇下賜せらる

●奇特なる娘　埼玉縣北葛飾郡幸手町大字幸手の古着商稻葉榮藏の長女あけ（明治六年七月生）は資性孝心厚く十歲の時母は長血症を患ひ荏苒癒へす其後病勢によりてか時々暴行し或は事なきに呵嘖等なすこと屢々なりしもあけは之に忤はす其温顏なるを見ては朝夕の食を問ひ其好む所に從ひて調進する抔至らざるなく之に加ふるに妹まけも性來不具にして平常の座作進退に至るまで本人の手を勞せさるを得さるにそ困苦の中に一層の難儀を加へしがあけは志操を變せず母及妹を看護すること十年一日の如く究乏の中に其不足を告けしめす孝養親愛至らざる所なかりしが母は廿五年に妹も其後死去せしにぞあけはしばし悲哀に暮れしが爾來一人の父に事へ暇あれば些少の賃仕事などなして其得る所の金を以て家計の費に充て居るとぞ

●可惜少女　但馬國豐岡町の京口町七十五番地松岡源十郎女松岡いしは一昨年迄豐岡高等小學校に就學し第三學年にして家事都合の爲め退學したるが客年六月初旬より不圖病に罹り種々看護の効なく客月十六日遂に不歸の客となりたり然るに同人病床中始終學校の事を語り愛慕感謝し殊に死前凡二十日平素餘暇に他人の裁縫を爲して漸次蓄へたる金一圓を學校へ寄付せんことを遺言し且つ兩親に先つの不孝を謝し自己在學中の教師生徒に永訣の意を表する等家内一同涙に咽ひたりと其父源十郎は亡女の遺言に依り金一圓に一通の願書を添へ此程同校へ差出せりと云ふ聞く者誰か愛惜せさらん況して其父母たる人に於けるをや聞くも涙の種にこそと大日本教育新聞に見ゆ

◎集會

●婦人の集會多し　賀すへし祝すへし先づ左に二三新聞紙の傳ふる所を記さん

●宮崎婦人慈善會　去る十七日新道通り安樂寺に於て其の發會式を擧行したり來會者は六十餘名席上佐田郡長、弘中唯見、秋田曾爾作等諸氏の演說あり會長には萩原知事の夫人當選し其の他の役員は不日撰擧する筈なりとは宮崎新報の報する所なり

●京都婦人慈善會　去る二十日午後京都高等女學校にて開會せしか出席者百三四十名ありて北垣夫人新島未亡人、中井安藤兩國手夫人等も出席あり翌日は本年の初會なれは先づ決算の報告をなし了りて茶菓を饗しこれより盲啞院職員生徒の寄附に關る餘興音曲に移り右餘興席には慈善會員及び高等女學校生徒等無慮二百四五十名入塲し居り頗る盛會なりしか此日更に十四五名の入會者あり日を追て盛大に赴むくの徵あるは賀すべき事なりとは平安新報の報する所なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●女子工藝獎勵會　青森縣工藤喜源司氏外數名が發起となり今回女子獎勵會なるものを設立し京橋區銀座三丁目二番地に假事務所を設け女子の工藝を獎勵する筈にて東京に本部を置き各地に支部を置く由又試驗の爲め同會の附屬として別に女子工藝傳習所を設け特別の工藝獎勵方法をも定むる筈なりと

●土佐婦人愛友會規則　此程設立せし仝會の規則は左の如し

第一條　本會は土佐人愛友會と名く　第二條本會は家事經濟及教育の一端を知らんと欲する婦人の爲に設く　第三條　本會の目的を達せん爲めに毎月第二土曜日正午より集會を開く時々教育家技術家等を招聘して婦女必要なる講談を乞ふ本會に起る必要なる事項は刊行して會員に分つとあるべし第四條　本會に入會せんと欲する者は會員の照會を要す但本縣婦人に限らす　第五條　本會は名望家を乞ふて賛成員とす第六條　本會は左の役員を置き會務を所理せしむ　會頭壹名　副會頭壹名　幹事五名　但し會頭及副會頭は投票を以て定め其任務一ヶ年とす幹事は抽籤を以て三ヶ月毎に更代す　第七條　本會々員は毎月金五錢を收む可し　第八條　本會は高知市北種崎町百二十七番地を以て假事務所とす第九條　本會の規則は會員の協議に由り變更改正することを得

◎風紀

●常磐樓主漸く移轉に决す　移轉延期の請願は眞誠の請願ならで實は非移轉の内密運動に狂したる表面の哀訴に過ぎず唾を以て涙に擬し宥容を冀はしむるは娼妓の事如何に此娼妓を苦ふ樓主なればとて餘りと云へば濫々しと氣みたるは當局者只直間に在り樓主が内々の使嗾に當局者を廻り廻りたる人々の心事想へば今更痴呆を見たりや、そは兎に角數百の娼妓を饑食にさせ客歳二十五日よりの營業停止如何に資産に裕なる樓主なりとて今は自ら呆れ、實は此春も門松こそ立てれ、ナアに威嚇だから四五日にて開店を許されるゝだらふと許にすまして度胸を据いたが流るゝ水と年の瀨は時計の針が止つて淀みなくざつ／＼と過ぎ今ヤ一月も二十日となり寄居の年越も目の前となりたるに付狐狸ア困しては居られぬと俄に騷ぎ立て今度こそ眞個に移轉と决し目下夜を日につぎて準備中なりと東北日報に見ゆ

●淫賣媒合の英人　曾て神戸港居留地警察署に巡査を奉職し居たる英國人ジョーシ・グリーンは同港に於て隙て日本婦人數名を雇入れ淫賣を爲さしめ居たる處其事露顯し英國領事館に於て審問中なりしが去る十九日禁錮一ヶ月附加罰金三十弗に處せられたりといふ英人屢々我れを侮る

●江湖青年矯風會　永瀧嘉之吉高島庄治石積源吉淺井政吉氏等の青年十數名の發起にて題號の如き矯風會を興し地方の風俗を矯正し尚ほ互に胸襟を開きて時事を討論し將來地方公共の事に付ては充分に青年者の氣焔を吐んとの計畫にて有志を募集せしに殆んど四十餘名の同志を得たるに付き不日會議を開き規則方法等を决議せんとて目下準備中との事（函館新聞）

◎片々

●女監取締に關する訓令

●内務省訓令第壹號　　廳府縣

女監取締及押丁の人員幷に俸給左の如く改む但明治廿八年四月一日より施行す

明治廿七年一月九日　內務大臣　伯爵井上馨

一女監取締は每監獄拘禁婦女二十五人以下は二人を置き以上は拘禁婦女二十五人を増す毎に女監取締一人を加ふ

一一監獄內に在るも拘置女監と四人女監の位地相隔離する所に在ては前項定員の外女監取締一人を増置することを得又稀に婦女を拘禁する小監獄に在ては相當の婦女を女監取締の豫備員に定め置き要ある毎に出勤せしむることを得

一押丁は拘禁男子五百人に付十人を置くことを得以上は拘禁男子百人を増す毎に押丁壹人を加へ以下は拘禁男子百人を減する毎に押丁一人を減す

一女監取締人員の増減は拘禁婦女に二十五人の差押丁の増減は拘禁男子に百人の差を生したるときに於て之を行ふ

一女監取締の俸給は四圓以上拾五圓以下とし押丁の俸給は四圓以上八圓以下とし總て月給とす

●英國婦人勞働の賃銀　英吉利、蘇格蘭、愛蘭の婦人勞働に付調査したる勞働問題調査委員の報告によれば何處も同じ婦人勞働の勞大にして報小なる事實を見る倫敦の裝服小間物店の如きは一切婦人のみ使用せるが是は同樣の賃銀にては迚も男子を雇ひ得ざるによるものにて其割合を按するに婦人一人一年廿五磅の賃銀を受くれば男子は五十磅を受くる勘定なりレットンにては裳衆を縫む婦人は一時間半片若くは一週間三、四志を儲くれば滿足す紡織物業にては一週間の賃銀三志六片位に過ぎざるものありまた一切家事を抛つてシカも仕事澤山なる時として初めて一週三志を儲くる者なりまた股衣縫ひにては一日十時乃至十二時間働きて一日に三志を儲くる者ありズボン仕立は一個半片の仕立賃にて一個を仕立るに少くも二時間を要す愛蘭ドチガルに於てはハンケチ縫ひ及び其他の縫物にて一日十二仙（米貨にして）乃至十八仙を得れば滿足す前掛一つ縫済するに九時間を費やして僅かに二片半を儲くる倫敦の東にては一週に七十時乃至八十時間働きて一年七十磅乃至八十磅取る者ありと國民新聞に見ゆ

●藝妓を運動者に使ふ　滋賀縣第一區の候補者中田長茂氏派は同地遊廓の藝妓一同へ「中田長茂君右衆議院議員候補者に定む第一區有志者」と記したる引札めきたるものを配布し置き遊客に其印刷物を蒔き散らさせ居る由（以上時事二十九日）

鈴木弘恭大人講述

第五版 百人一首講義

（附錄小倉てびき）

正價金廿八錢
郵稅六錢

御高評を得たる百人一首注文いよ／＼多く第四版品切に成りたれば茲に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ／＼の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得て至極重寶なり。

巖本善治氏序
德富猪一郎氏序
竹越竹代氏編

婦人立志編

定價二十錢
郵稅四錢

今や婦人敎育の問題喧びすしと雖も、婦人の模範とすべき女傑の傳記を讀ましめ、自ら鑑みしむるにあらずんば効あるなし。此の書は泰西各國女傑の傳記を婦人立志の助となすべき樣に編述したるものにして、愉快を以て讀む間に、自然に女傑の精神を呼吸せしむるを目的とす。且つ從來ありふれたるものと異なり、新たに泰西の好著述を跋獵して作りたるものにして、婦人文學者あり、婦人宗敎家あり、婦人政治家あり、貞婦あり、賢母あり、慈善家あり、女學生、家庭及び人の母姉たるもの、必らず一本を具へざるべからざるもの也。若し家庭に於て燈火の下、姉妹母子相對して之を會話せば、其面白さと利益とは如何に大ならん。婦人の傳記の外、泰西の大學者が、自立、自助の精神を以て述べたる文章を、其間に挿みたればまた一の家庭修身書と云ふべし。

前文部大臣海軍中將從二位勳一等子爵 榎本武揚題字

醫科大學產科學婦人科學敎授 醫學博士濱田玄達先生
醫科大學小兒科學敎授 醫學博士弘田長先生 校閱

文部省學校衞生事項取調囑託帝國大學大學院醫學士 三島通良先生編述

皇后陛下御覽

はゝのつとめ

全二册
定價金五十錢
郵稅金六錢

增補訂正第五版 美畫入日本綴美本

目錄

親の卷

第一章 妊娠
第二章 妊娠中の養生
第三章 出産
第四章 産蓐

子の卷

第一章 小兒敎養法の精神
第二章 人乳
第三章 乳母
第四章 人工養育法
第五章 生齒迄の小兒敎養法
第六章 生齒
第七章 生齒後夜の小兒敎養法
第八章 種痘
第九章 小兒の疾病及攝生法
第十章 身體の發育智識の發達より就學兒となる迄の母の職務

賣捌所

東京神田表神保町六番地

女學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

星野光多先生編

修德養信

思想の林

一名日毎のさとり

古今碩學達德の宗敎及び道德上高論卓說にして修德養信上非常の利益を得せしむべき聖思想凡七百餘項載せて此書に在り此書日々分讀の分として聖書の本文一二節と之を說明すべき聖思想一二項を加ふ而してその編成の體裁一に釐きに編者が著せし談林に同じ彼は宗敎道德上實際的事實の茂林此は宗敎道德上理想的聖思想の叢林讀者朝たに一日萬事を始むるに當り先づ此思想林の中の新思聖想を索ね以て一日養神防邪の資料となし夕に家族團欒するに臨み清話美談を彼の談林の中に取らば讀書の快默想の益盖し非常なるべし

全壹冊美本紙數四百頁
定價金五十錢郵稅六錢

星野光多君編

立德堅信

談林

一名日毎のちから

四百三十餘頁

定價四十錢
上製五十錢
郵稅八錢

談林は古今の美談三百三十餘件名家の卓說百六十餘項を網羅したるものにて宛然談話の小世界なり之を名けて林と云ふ寧ろ謙遜ならんか說敎者敎育者學生は申すに及ばず苟も自他德性を養成せんと欲するものは良材名木を多く玆に得べし談林編纂の目的は立德堅信にありて而して其體裁たる聖書の名句を題詞となし極めて適切なる美談清話若しくは高論卓說を以て之を說明し一年中週通して毎日讀まるゝ樣に編れたりして丁寧綿密なる索引を附せり近來片々たる小冊子多く上梓すれども未だ此編の如く多くの事實を集めたるものなく多くの議說を輯めたるなし故に紙數四百三十頁と云ふと雖どもその百餘頁は細字(六號文字)を以て記したり此書一名日毎の力と云ふ實は日毎の方の倉庫なり

發兌 東京市新橋出雲町 **警醒社書店**

賣捌所 東京神田區表神保町六番地 **女學雜誌社書店**

齒磨之大王

○品質最良芳香美粉なり

當時流行なる人造麝香入水おしろいにて美人となる至極適當の品なり

元祖
人造馨香入

定價金五錢

諸賣藥 化粧品 問屋

宮內省御用達
小町水本店
岳陽堂

東京馬喰町二丁目
平尾贊平
●電話六二五番●

全國中無限の取次所あり

廣告

本院今般岡山孤兒院に合併致候也

名古屋市白壁町 震災孤兒院

牧畜雜誌

一月十日發兌 第百貳拾號目次

○論說

○○馬產の方針迎明治廿七年　今泉六郎述
　　　　　　　　　　　　　　獸醫學士　佐藤清明

○雜錄

○福島中佐遠征乘馬ヒンァン號の圖解○單騎遠征馬談○冬季畜牛舍飼法(承前)○禽畜の懷姙期(接第百拾七號)○家の林量と飼料の關係○不純牛乳の原因○眞正鼻疽の接種○○傳書鴿米國牧畜實況見聞記事(接第百拾七號)○兵庫縣下の製革產額○○犬の救難隊○長崎縣下の牛疫續報○家畜共進會の計畫

○統計○馬匹現在數累年比較○講話○家畜蓄殖法(承前)肥塚正太○寄書○家禽千羽飼ひの問答(承前)○下總牧羊場の起因(承前)豐岡町種禽塲主加納正治

○問答

○牝牛の春情に付質問の答○兎の件に付質問の答○牝牛の妊娠に付質問の答○矮狗の件に付質問の答○家禽の疾病に付質問○肉の鑑定法に付質問○煉乳の件に付質問

一冊金七錢●三ヶ月分金四拾錢●半ヶ年分金七拾五錢●一ヶ年分金壹圓四拾錢●外郵便稅一冊ニ付金五厘宛

發行所　東京市日本橋區吳服町卅二番地　牧畜雜誌社

史海

壹月廿九日發兌

第三拾卷目次

◎春日の神威……………久米邦武君

相變らす創見なり、天孫人種の關東に於ける殖民の事より鹿島神を引出し忌部氏及ひ中臣氏即ち藤原氏との關係に論及したる手際は愛てたき

◎兼好法師……………岡田岬雲君

文章流麗にして事實精確なり、兼好法師千歲の寃雪き得て淸し

◎式亭三馬……………O・F・君

式亭三馬奇想なきにあらずと雖も其文見るべからず、今O.F.君の文を以て之を叙せらる三馬地下にありて歡喜雀躍すへきなり

◎露國皇后カタリナ第二世が皇帝ペートル第三世を謀殺したる始末……………渡邊修二郎君

君の文往々人の皮肉に入る、而して此文最も其甚きものなり

◎考證○上代考一斑○楠公湊川碑石塔考○石川年足朝臣誄事◎批評數件

(定價)一冊金九錢。十冊前金七十五錢。市外は一冊に付郵稅二錢增◉每月一回發兌

發行所　東京京橋區彌左衞門町　經濟雜誌社

大取次　東京。東京堂、巖々堂、東海堂●大坂　岡島新聞舖●京都。便利堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

俳諧史傳

近刊

◉小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』正さに出むとす。嘗て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

◉思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

◉俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的敍情短歌の面目を構成す。

◉其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を敍し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

◉これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を横溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奥に冥合せしむるに足らむ。

◉若しそれ、一字苟もせす、一筆輕々に下さず、言々證あり、句々據るところあり、而も文章、平易簡明、敍記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

◉今や我社は斯の『俳諧史傳』の印刷に着手せり。讀者の机邊に現るゝは旬日の中にあらむ。敢て豫め公告すると爾かり。

發行所 東京神田表神保町六番地 女學雜誌社書店

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵稅共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵稅共郵便小爲替にて拂渡局を必らす

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

請取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割増(五厘切手に限る)にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事。

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日内務省許可
明治廿七年二月二日印刷
明治廿七年二月三日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京北豊島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
印刷所 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)